論　文

砕葉とアクベシム
―７世紀から８世紀前半における天山西部の歴史展開―（増訂版）[1)]

齊　藤　茂　雄※

※　帝京大学文化財研究所

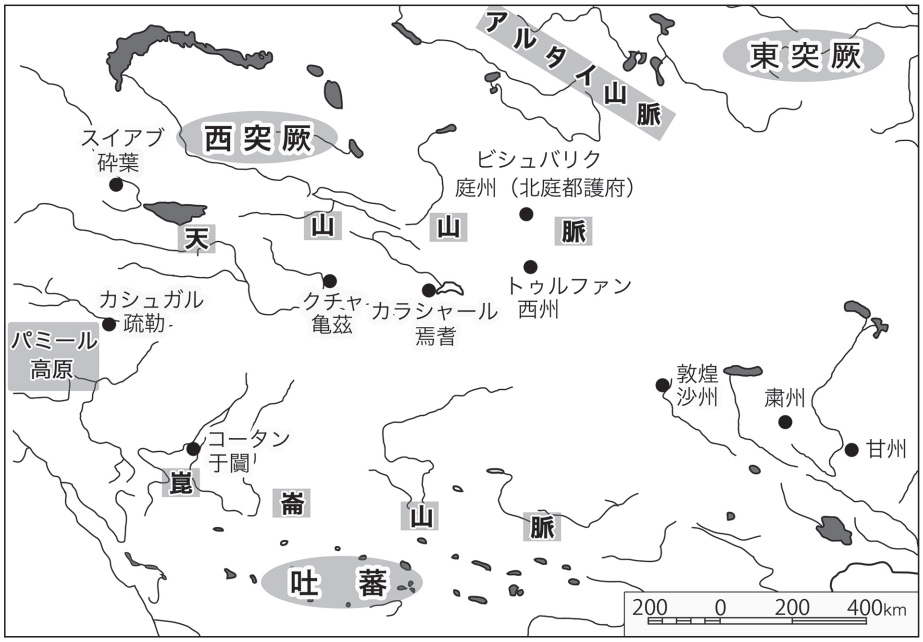
はじめに
Ⅰ．砕葉をめぐる歴史的展開
Ⅱ．「杜懐宝碑」について
Ⅲ．結び

はじめに

７世紀中葉から８世紀初頭の中央アジアは、新興勢力である唐による活発な軍事進攻が見られた一方、現地の遊牧勢力である西突厥や、やはり新興勢力であるチベット高原の吐蕃の進出もあり、オアシス諸都市の権益をめぐる角逐が盛んな時期であった【図１】。なかでも、唐が西方に進出した最大領域として知られる砕葉鎮の歴史的重要性に関しては、唐の西域支配拠点である安西四鎮との関わりから、古くから関心が持たれ、多くの研究が残されてきた。まず、安西四鎮の沿革について論じた大谷［1925］があり、後に松田［1933］、伊瀬［1955］、佐藤［1958］などの先学が多大な業績を挙げられている。にもかかわらず、これら諸先学の研究はそれぞれ断片的であって、砕葉を含むタリム盆地周辺の歴史を先行研究の議論をまとめつつ概観するような作業は、森安［1984］やベックウィズ［Beckwith 1987］が吐蕃帝国の進出を主眼として論じて以来、ほとんど行われていない。しかも、森安・ベックウィズ両氏の研究の後、砕葉と深い関わりを持つ天山北麓に拠った遊牧民である西突厥の歴史について論じた内藤［1988］が出版されたため、これらの研究をつなぐ作業が必要となった。

また、上記の先行研究ではあまり触れられていないものの、砕葉を含む西部天山地域においては考古学的な調査が進行しており、加藤［1997］が概説的に紹介を行っているほか、ヌルラン・ケンジェアフメト［2009;努尔蘭・肯加哈買提 2017］の研究もある。その中には、砕葉に関して重要な意義を持つ漢語碑文が含まれていて、この碑文に関しても先行研究がいくつか出されている。

以上のような状況から、本稿ではまず７世紀から８世紀にかけての砕葉をめぐる諸勢力の活動、その歴史的展開をできうる限り先行研究の議論を踏まえながら年代順に提示し、先学の到達点を示す。続いて、キルギス国アクベシム遺跡出土の「杜懐宝碑」を取り上げ、その砕葉との関わりを紹介したい。



【図１】関連地図（『中国歴史地図集 第五冊』，pp.32-33 を参考に作成）

Ⅰ．砕葉をめぐる歴史的展開

（1）砕葉と西突厥

本章では、西突厥・唐・吐蕃といった勢力がいかに

西域地方に進出し、碎葉と関わりを持ったかを、先行研究の成果に依拠しながら概観する。

碎葉周辺に最初に進出した勢力としては、西突厥がいる。西突厥は552年にモンゴル高原で勃興した突厥の西半部であり、突厥の始祖・ブミン可汗（伊利可汗）の弟であるイシュテミ可汗[2)]を事実上の始祖とする。突厥は583年に東突厥と西突厥がアルタイ山脈を挟んで分立し、基本的にイシュテミ可汗の子孫が西突厥を継承していった[3)]。

西突厥の本拠地は当初、ユルドゥズ平原（現在はバインブルク平原と呼ばれている）に置かれていたが［松田 1970, pp.248-287］、統葉護可汗が碎葉付近に本拠地を移したという［松田 1970, pp.287-288；内藤 1988, pp.2-3］[4)]。

碎葉（素葉・睢合・雖合とも）とはイスラム史料に現れるスイアブ Sūyāb の音写であり、現在のチュー河を指すが、唐代には既に地名となっており、チュー河流域の平原も指していた［内藤 1988, pp.1-2］。そこには碎葉城（現アクベシム遺跡[5)]）が建設された。碎葉城に関する古い漢籍中の記述としては、630（貞観四）年に当地を訪れた玄奘の記録[6)]がある。

『大唐西域記』巻一（p.18）
清池西北行五百餘里、至素葉水城。城周六七里、諸国商胡雑居也。土宜糜・麦・蒲萄。林樹稀疎。気序風寒、人衣氈褐。素葉已西数十孤城、城皆立長。雖不相禀命、然皆役属突厥。
【和訳】清池（イシク＝クル）の西北に500里あまり（約 220km）で素葉水（スイアブ）の都市に到着する。都市の周囲は６・７里（約 2.5～3km）であり、諸国のソグド商人が雑居している。土地はキビ･ムギ･ブドウに適している。木々は少ない。（その）気候は風が冷たく寒いので、人々はフェルトの服を着ている。素葉以西にある数十の独立した都市は、皆（各々の）君長を立てている。命令を受けているわけではないが、（西）突厥に隷属している。

この記録で注目すべきなのは、碎葉城には各国から商人がやってきて居住しているという点と、碎葉城を含んだ諸都市が西突厥に隷属しているという点であろう。碎葉城はシルクロード上の国際商業都市であり、当時、強勢であった西突厥に服属していたのである。

では、西突厥の中心地はどこにあったのだろうか。この点に関しては、内藤［1988, pp.1-21］の詳細な検討があり、まずは玄奘の報告に注目している。

『大慈恩寺三蔵法師伝』巻二（pp.27-28）
循海西北行五百餘里、至素葉城。逢突厥 葉護可汗。方事畋遊、戎馬甚盛。･･･（中略）･･･既与相見、可汗歓喜云、「暫一処行、二三日当還。師且向衙所」。令達官答摩支引送安置。･･･（中略）･･･自此西行四百餘里、至屏聿。此曰千泉。地方数百里、既多池沼、又豊奇木。森沈涼潤、即可汗避暑之処也。
【和訳】海（イシク＝クル）に沿って西北に 500 里あまり（約 220km）で、素葉城に到着した。（そこで、西）突厥の肆葉護可汗（ヤブグ）[7)]に会った。ちょうど狩りに出かけようとしていたので、軍馬が大変強壮であった。･･･（中略）･･･（玄奘が）面会したので、可汗は喜んで「しばらくある所に行きますが、２・３日で帰るでしょう。法師様はとりあえず牙帳に向かってください」と言った。（そして）達官（タルカン）の答摩支に命令して（玄奘を）引率して（牙帳に）送り、休ませた。･･･（中略）･･･ここ（牙帳）から西方に400里あまり（約 176km）で屏聿に到着した。ここは千泉ともいう。その土地は数百里四方で、池や沼が多いのみならず、珍しい木が豊かに茂っている。森林が鬱蒼としていて清涼湿潤であるので、可汗の避暑地である。

この史料は、玄奘がインドに向けた求法の旅の最中に、道中の安全を求めて西突厥の肆葉護可汗のもとを訪れた際の記録である。ここには、玄奘が肆葉護可汗と碎葉城で会ったが、可汗は狩りに出かけるところであったため、可汗は答摩支に命令して先に玄奘を牙帳に連れて行かせたとある。牙帳とは、可汗の本拠地のことであるが、その牙帳が碎葉城から離れた場所にあったことが、この玄奘の記録から見て取れる。

内藤氏は、この史料の記述に加え、諸々の漢籍やイスラム史料に散見される歴代の西突厥あるいは西突厥滅亡後における旧西突厥系の可汗の本拠地に関する記事を博捜し、玄奘の記録と同時期に当たる統葉護可汗以降、西突厥滅亡後に強勢を誇った突騎施（テュルギッシュ）にいたるまで、西突厥系政権の牙帳は碎葉城北方にあるチュー＝イリ Chu-Ili 山脈にあったと結論付けている［内藤 1988, p.48］。

一方、上の『大慈恩寺三蔵法師伝』の記事には、千泉が可汗の避暑地であるとの記録がある。千泉は砕葉城西方にある現在のメルケ Merke 付近に比定されており、西突厥可汗の夏営地であると考えられている［松田 1970，pp.288-289］。

このように、西突厥可汗は砕葉城周辺において季節移動を行っていたのであるが、『大唐西域記』の記述に従えば、砕葉城はあくまで自らの君長を置く独立都市であり、可汗の居所ではなかったことに注意すべきであろう。

(2) 唐の西域進出

西突厥は、630年代から有力者同士の内部分裂によって弱体化していった。その後、タリム盆地から砕葉周辺にまで進出したのは唐である。唐は630(貞観四）年に伊吾（ハミ）オアシス、634～635（貞観八～九）年に吐谷渾を討伐して鄯善・且末地方を奪取し、西域進出へと乗り出した［松田 1937，pp. 111-114；森安 1984，p.133］。そして、639（貞観十三）年にトゥルファン・オアシスに侵攻し、翌640（貞観十四）年にトゥルファンに安西都護府を設置した［大谷 1925，pp.274-277］。さらに、644（貞観十八）年には焉耆（カラシャール）オアシスに侵攻している［松崎 1987］。一方、唐は西突厥を屈服させる計画も同時に進めていた。ついに642(貞観十六）年頃には、唐朝の使節立ち会いの下で選出された乙毗射匱可汗が新可汗として即位することとなったが、この可汗はタリム盆地に勢力を伸張することができなかったため、唐は648(貞観二十二）年に亀茲（クチャ）オアシスを攻略してここに安西都護府を移置し、同時にタリム盆地の拠点となるオアシス諸国家に安西四鎮[8]を設置した［松田 1970，pp.360-361；内藤 1988，pp.27-29］。

このように、安西四鎮の設置により唐の支配がタリム盆地全体に確立されたのであるが、安西四鎮の構成として亀茲・疏勒（カシュガル）・于闐（コータン）までは問題ないものの、最後の一つに砕葉が入るか焉耆が入るかが、史料に二通りの記述があり、研究者の間でも議論が割れている。砕葉を四鎮に含める史料を否定的に捉える諸氏は、西突厥の勢力圏である当地に唐が勢力を伸ばすことなどできなかったはずだということを論拠としている［松田 1933，pp.360-361；岑仲勉 1958，p.29；周偉洲 1977，pp.139-140；呉宗国 1982，pp.166-167；薛宗正 1984, pp.74-76］。しかし、それに対して内藤［1988, pp. 21-29］は、次の論点から砕葉説を支持する。①692（長寿元）年に唐が砕葉を含む安西四鎮を奪還した際、則天武后が「貞観中の四鎮」回復を喜んでいるため、その四鎮の中に砕葉を入れるべきであること。②安西四鎮初置当時、唐は西突厥に対して上述したように乙毗射匱可汗を冊立した。さらには王族の阿史那賀魯も支配下に加えて西突厥統御を担わせており、砕葉まで勢力圏に入っていた可能性は十分にあり得ること、の二点である。

さて、唐の勢力伸長に対して、西突厥では上述の阿史那賀魯が、649(貞観二十三）年に太宗死没の隙を突いて唐より独立した。唐は651(永徽二）年から657(顕慶二）年にかけて、別の西突厥王族である阿史那弥射・歩真や漠北にいた鉄勒諸部まで動員し、三度に及ぶ遠征軍を派遣してようやく賀魯を捕らえることに成功した[9]。

ただし、一般的に、この賀魯政権の崩壊をもって「西突厥の滅亡」とされるが、単に以後イシュテミ可汗を祖とする正統な阿史那王族による遊牧国家が登場しなかったというだけで、西突厥を構成していた部族自体は活動を続けていくので注意が必要である[10]。８世紀前半に大勢力を築く突騎施（テュルギッシュ）も旧西突厥の一部族であった。内藤［1988，pp.62-64, 67-68, 117-131］によれば、滅亡前の西突厥は、第５代咥利失可汗の部族改革以降、可汗の下に10の部族が従属するという形態をとるにいたったが、滅亡後には上位にいた可汗王族が除かれ、下位にいた10部族による連合政権として再構成されたという。その連合政権は、漢籍史料では「十姓」や「十箭」、突厥碑文では「On Oq（10本の矢)」と呼ばれるもので、680年代から690年代の間に旧西突厥そのものを示す名称となっていくという。

一方、西突厥正統王族も断絶したわけではなく、西突厥の可汗一族という権威を利用して、傀儡可汗として冊立され、旧西突厥民衆の羈縻支配（間接統治）に利用されることとなる。その最初の例が上述した阿史那賀魯征討に活躍した阿史那弥射と歩真である。

唐は、阿史那賀魯の率いていた10部落を東西に分け、657(顕慶二）年十二月に、西の五弩失畢部に阿史那歩真を配置してこれを継往絶可汗・濛池都護とし、東の五咄陸部に阿史那弥射を同じく配置して興昔亡可汗・崑陵都護とした［内藤 1988，pp.30-32］。

そして、西半を管轄した濛池都護府の中心地が砕葉に置かれたと考えられている［内藤 1988, p.44］[11]。ところが、662（龍朔二）年に継往絶可汗・阿史那歩真によって興昔亡可汗・阿史那弥射が謀殺されると、早くもこの体制は崩れた。残った阿史那歩真も旧西突厥全体を支配するにはいたらずに乾封年間（666～667年）に殺害され、西突厥は支配者が不在となったという［内藤 1988, pp.271-275］。なお、内藤氏は、この継往絶可汗・阿史那歩真の死と同時に安西四鎮の一つであった砕葉鎮が放棄され、代わりに焉耆鎮が加えられたと考えている［内藤 1997, p.155］。西突厥の混乱の中、唐は支配を維持できなくなったと考えられる。

（3）唐と吐蕃の安西四鎮争奪

この後の砕葉を含む安西四鎮をめぐる情勢は、極めてめまぐるしくなる。まず、タリム盆地方面に新たに吐蕃が勢力を拡大する。吐蕃はソンツェン＝ガムポ王（６世紀末～649年）によってチベット高原を統一する大勢力となり、この王の時に唐から文成公主を降嫁されたことはもはや説明を要しないだろう。しかし、ソンツェン＝ガムポ王の時代にはタリム盆地への進出の動きはほとんど見られず、本格的な進出が見られるのは、興昔亡可汗・阿史那弥射が継往絶可汗・阿史那歩真に謀殺された662（龍朔二）年のことである［森安 1984, pp.138-139］。阿史那弥射が殺された後、歩真とともに弥射を討った颺海道総管・蘇海政が疏勒を攻撃した際、疏勒救援の兵を送ったのが五弩失畢部の一つである弓月部と吐蕃であった［松田 1930, p.325；森安 1984, p.139；内藤 1988, p.272］。この時には、吐蕃は深入りすることなく撤兵し、疏勒は唐の支配に復帰したが、内藤［1988, pp.272-273］は、この時の吐蕃の派兵は後のタリム盆地進出の布石であったとする。

そして、吐蕃は670（咸亨元）年にタリム盆地掌握へ向けて大規模な軍事行動に出る。安西都護府がある亀茲を攻撃したのである。この時の攻撃によって安西都護府は陥落してクチャ（亀茲）からトゥルファン（西州）に後退し[12]、安西四鎮は吐蕃の勢力圏に入ることとなった［森安 1984, p.143］。吐蕃は青海地方の吐谷渾も同年に制圧しており［山口 1983, pp.686-694］、吐蕃の勢力拡大は著しかった。

それにもかかわらず、吐蕃の支配は数年しか持たず、早くも672（咸亨二）年には安西四鎮がクチャに復帰し［劉子凡 2016, p.177］、673（咸亨四）年から676（上元三）年までの間に安西四鎮は順次唐に復帰したが、なぜ吐蕃が簡単にタリム盆地から手を引いたか分かっていない［森安 1984, pp.145-146］。とはいえ、吐蕃はタリム盆地進出を諦めたわけではなかった。677（儀鳳二）年に処木昆部の阿史那都支が十姓可汗を称して反乱を起こすと、吐蕃はこれと連合して安西四鎮を再び陥落させる［森安 1984, pp.146-149；内藤 1988, pp.276-278］。内藤［1988, pp.276-277］によれば、チベット語の年代記に阿史那都支と見られるテュルクの王が現れ、吐蕃の宰相を自らのもとに招待する676（儀鳳元）年までには、都支は砕葉を拠点として西突厥全体を勢力下に置いていただろうと推測している。

しかし、唐はさらに反撃して679（調露元）年に阿史那都支を撃破した。次章で詳しく述べるように、裴行倹がペルシャ王家の末裔を利用して阿史那都支を奇襲し、これを捕らえることに成功したのである。ちょうど、吐蕃では政権争いによる混乱があって、タリム盆地に進出する余力を失っていたようだ［森安 1984, pp.149-150］。この時、唐は阿史那都支の本拠地であった砕葉を攻撃して砕葉城を接収し、焉耆鎮に代えて砕葉鎮を安西四鎮に加えることとなった。ただし、この時点で安西四鎮が全て唐の支配下に戻ったどうかという点は史料の裏付けが無く、不明である［cf. 森安 1984, pp.149, 208-209, nn.74, 76; Beckwith 1987, pp.46-47, n.47］。

いずれにせよ、679年に王方翼によって砕葉城が本格的に整備されることとなった。その際のことは次の史料より良く知られている。

> 『旧唐書』巻一八五上「良吏伝上 王方翼」（p.4802）
> 又築砕葉鎮城。立四面十二門、皆屈曲作隠伏出没之状。五旬而畢。西域諸胡競来観之、因献方物。
> 【和訳】さらに（王方翼は）砕葉鎮の都市（の城壁）を建築した。（城壁の）４面に（全部で）12の門を立て、（それらの門は）すべて屈曲していて、（兵の）出撃や退却を隠す形となっていた。50日で（工事は）終わった。西域の外国人（ソグド人）たちが競いやって来てこの城壁を見て、土地の物を献上した。

この時に修築された城壁は、砕葉城に比定されているアクベシム遺跡において、「ラバド（第２シャフ

リスタン）」と呼ばれる部分に相当すると考えられている［Горячева / Перегудова 1996, p.186；cf. 加藤 1997, pp.148-149；柿沼 2019, p.51］。砕葉城とアクベシム遺跡との比定については、次章で詳しく述べるが、ここで特徴とされているのは城壁の形状と門の数であり、アクベシム遺跡の発掘から本史料を裏付けることができるかどうか、今後の発掘調査に期待したい[13]。

唐は、安西四鎮の復帰を受けて、再び旧西突厥10部の間接統治に乗り出したようだ。その際には、やはり正統西突厥王族を傀儡として利用している。685（垂拱元）年には、阿史那元慶を、父・阿史那弥射を継がせて東５部を統括する興昔亡可汗・崑陵都護に任命し、686（垂拱二）年には、阿史那斛瑟羅を、やはり父・阿史那歩真の跡を継がせて西５部を統括する継往絶可汗・濛池都護とした［内藤 1988, pp.288, 307］。ところがこの直後、安西四鎮は再び吐蕃の勢力下に入るのである。伊瀬［1955, p.260］・佐藤［1958, pp.348-352］・森安［1984, pp.150-151］・ベックウィズ［Beckwith 1987, p.50］は安西四鎮陥落の年を687（垂拱三）年とする。一方、周偉州［1977, pp.141-143］や内藤［1988, pp.291-293］は、トゥルファンのアスターナ墓地より出土した「氾徳達告身」（68TAM100：1；『吐文』3, p.406）に引用された垂拱二年十一月勅に、「金牙軍は于闐・安西・疏勒・砕葉等四鎮を抜く（金牙軍抜于闐・安□(西)・□(疏)勒・砕葉等四鎮）」とあることから、「抜」を放棄の意と取って686（垂拱二年）年としている。686年説に従うならば、四鎮のうちに砕葉鎮が含まれており、この時点で砕葉城は吐蕃の支配下に入ったと考えられる[14]。

この吐蕃の攻撃はさらに唐が統治を目指した西突厥にも拡大した。東部の興昔亡可汗・阿史那元慶は686～689（嗣聖三～永昌元）年の間に吐蕃によって捕らえられ、その後、解放されたようだが西突厥には戻らずに唐国内に入り、692（長寿元）年に誣告によって処刑される［内藤 1988, pp.290-291］。

一方、西部の継往絶可汗・阿史那斛瑟羅は吐蕃の攻撃を蒙らなかったようだが、その分、東突厥（突厥第二可汗国）の侵攻を蒙った。突厥第二可汗国は、630（貞観四）年より唐の羈縻支配に服していた突厥第一可汗国の遺民を中心として、682（永淳元）年に内モンゴルで建国された[15]。東突厥は、建国直後から旧西突厥への侵攻を繰り返しており、690（天授元）年に耐えきれなくなった斛瑟羅が唐に逃れることとなったようだ［内藤 1988, pp.305-314］。

さて、吐蕃による安西四鎮奪取に対して、唐は反撃を試みたが、二度にわたる安息道行軍の吐蕃攻撃は失敗に終わった［伊瀬 1955, p.260；内藤 1988, pp.293-295］。そして、唐がようやくこれを回復したのは、692（長寿元）年から694（延載元）年におよぶ吐蕃との決戦に勝利した結果であり、旧西突厥から勢力を増してきた新興勢力である突騎施の烏質勒と結んだことが勝利に繋がった［森安 1984, pp.152-154］。この時、回復した地域には、692（長寿元）年の記事に、「乃ち亀茲・于闐・疏勒・砕葉四鎮を克復して還る（乃克復亀茲・于闐・疏勒・砕葉四鎮而還）」［『旧唐書』巻九三「王孝傑伝」（p.2977）］とあることから、砕葉城も含まれていたことがわかる。これに対して、吐蕃は692年の阿史那元慶処刑を受けて立ったその子、阿史那**俀**子を694（延載元）年にトン＝ヤブグ（統葉護）可汗に擁立し、旧西突厥の糾合を試みた［内藤 1988, pp.295-298］。その結果、呼応した旧西突厥諸部が砕葉を攻撃したが、砕葉鎮守使であった韓思忠が迎撃し、千泉で吐蕃の軍を撃破しており［内藤 1988, pp.298-302］、安西四鎮を奪還するにはいたらなかった。それでも、内藤氏は阿史那**俀**子は乱の失敗後も砕葉平野の一角に勢力を保ち続けただろうと推測している［内藤 1988, p.323］。吐蕃が西突厥の王族を傀儡とした理由は、西突厥、特に砕葉平野を四鎮とともに支配するためであった［内藤 1988, p.304］。唐に続いて、吐蕃も旧西突厥王族を利用して砕葉進出を目指したのである[16]。

（4）突騎施の台頭と東突厥の侵攻

この後、状況はさらに複雑化する。唐の安西四鎮奪還を援助した突騎施の烏質勒がさらに強勢化して自立していく一方、東突厥も天山方面への侵攻を諦めず、旧西突厥を介在した唐と吐蕃との争いに参入してきたからである。唐は、700（久視元）年に再び阿史那斛瑟羅を今度は可汗としてではなく平西軍大総管として砕葉に派遣した。内藤［1988, pp.319-321］によれば、斛瑟羅が可汗を名乗らなかったのは、拓西可汗を派遣して旧西突厥へと勢力伸張をはかる東突厥に対し、西突厥としてではなく唐の将軍として派遣したことを明示する意味合いと、もともと西突厥の臣下であった突騎施を抑え、旧西突厥を安定

させる意味合いとがあったという。

これに対して、吐蕃もまた700年に阿史那𢖍子を利用して行動に移った。チベット語史料（Old Tibetan Annals, ver. 1, *l*. 133）には、この年にトン＝ヤブグ可汗（＝阿史那𢖍子）をDru-gu（テュルク）[17]国に派遣したとする記述がある［Dotson 2009, p.101］。この時の派遣先であるDru-gu国がどこか明らかではないが、二通りの解釈がある。ひとつには、当時、唐に対して反乱を起こしていた旧西突厥系と見られる阿悉吉薄露への援軍とする見方である［森安 1984，pp.157-158；内藤 1988，pp.322-323；Beckwith 1987, p.62］。阿悉吉薄露は吐蕃とともに反乱しており、それに呼応する形で阿史那𢖍子が派遣されたというわけである。そして、もうひとつの見方としては、東突厥に派遣されて吐蕃と東突厥の共闘の使者となったとする考え方がある［森安 1984, pp.158-159］。いずれにせよ、吐蕃は阿史那𢖍子を媒介にして草原世界へ進出することを継続して行っていたのである 。

ところが、このような唐・吐蕃の動きにもかかわらず､この後に砕葉を確保したのは突騎施であった。突騎施の烏質勒は703（長安三）年に砕葉を奪取して斛瑟羅を追放すると、旧西突厥諸部の抵抗を抑えて天山方面の最大勢力となった［内藤 1988，pp.324-328］。それでも漢籍史料には砕葉鎮の存在が見えているが、これは、突騎施の妥協により、唐が砕葉鎮守使を名目的に砕葉城に置くことが可能であっただけで、実質的には唐の勢力圏にあったとは言えないとされる［松田 1933，pp.367-369］。しかし、実際に砕葉城にも唐の鎮兵が数百人単位と少ないながら駐屯しており、これは、中央アジアへの進出を狙う突厥第二可汗国の侵攻を防ぐため、唐と突騎施の利害が一致した結果であるとされる［王小甫 1992, pp.282-288］。その際、710（景龍四）年に出された制勅「命呂休璟等北伐制」［『唐大詔令集』巻一三〇（p.705）］には、北庭都護の呂休璟が砕葉鎮守使の肩書きを帯びているのが確認できる。劉子凡［2016, pp.239-240］は、実際に北庭都護が砕葉城に支配を及ぼしていたわけではないが、この肩書きを持つことで旧西突厥諸部を名目的に統治下に置く権限を付与され、突騎施やその他の旧西突厥諸部との連携を取ることができたと見なしている。このように、唐と突騎施との間の提携関係によって、砕葉鎮には名目的ではあれ、からくも唐の勢力が残存することになったのである。

706（神龍二）年に烏質勒が死去した後、突騎施はその子、娑葛が跡を継いだが、その際、唐は阿史那斛瑟羅の息子であり、十姓可汗に冊立した阿史那懐道を派遣して、娑葛に嗢鹿州都督・懐徳郡王を与えた［内藤 1988，pp.335-339］。斉藤［1991，pp.36-37］は、この時、阿史那懐道[19]が派遣され、娑葛に可汗号ではなく都督号が授与された理由として、唐が娑葛に周辺諸国並みの待遇を与えて懐柔しようとした一方で、正統な西突厥王族であり、そのうえ十姓可汗である懐道を派遣することによって、西突厥の「正統な可汗」の存在をアピールし、娑葛よりも懐道の方が上位であることを示そうとしたと指摘する。さらに、708（景龍二）年には、御史大夫・解琬が派遣されて娑葛に金河郡王の位が与えられている。

このように、唐と娑葛の関係は良好であったが、その直後に両国の関係は一時的に悪化する。唐に降っていた烏質勒の部下、阿史那忠節の建議により、708年に唐が娑葛攻撃を計画したのである。これに対して、娑葛が可汗を自称して西域各地にいた唐の駐屯軍に攻撃を仕掛けると、唐は第二代興昔亡可汗･阿史那元慶の息子である阿史那献（すなわち、吐蕃の傀儡可汗となった阿史那𢖍子の弟）を「十姓可汗」に冊立して、最前線となっていた焉耆に投入した［内藤 1988，pp.349-352］。しかし、娑葛の攻撃によって完敗し、その際に忠節も娑葛に捕らえられてしまった［内藤 1988，pp.346-349］。翌709（景龍三）年七月に娑葛から和平の要請があったものの[20]、唐は大幅に譲歩せざるを得ず、翌709（景龍三）年に娑葛を「十四姓可汗」に冊立している［『旧唐書』巻九七「郭元振伝」（p.3048）］。この時、娑葛が得た「十四姓」とは、旧来の「十姓」に加えて、やはりトルコ系の三姓葛邏禄（カルルク）の「三姓」を加え、さらに三姓咽麪を加えるが、これは、小部族であり族長も１人の葉護（ヤブグ）からなっていることから「一姓」と見なされたもの、とされている［佐藤 1942, p.11；内藤 1988, pp.355-357］[21]。内藤氏は、これは娑葛が708年に可汗を自称した際の称号を唐が追認したものであり、中に「十姓」を含んでいることから、阿史那献の「十姓可汗」は廃止されたとする［内藤 1988, pp.352-354］。

この時の可汗冊立により、唐は娑葛の旧西突厥における覇権を名実ともに認めたと考えられる［斉藤 1991，p.37］。そして、大澤［1996，pp.12-16］によ

れば、この時の冊立は、モンゴル高原より北方の、イェニセイ河流域にいた黠戛斯（キルギズ）が仲介して実現したものであった。この当時、漠北の突厥第二可汗国が第二代の默啜可汗（カプガン可汗；691～716年）のもとで強勢化し、708年前半期に黠戛斯のバルス＝ベグを傀儡可汗として即位させたため、それに対抗するために唐・突騎施・黠戛斯の３ヶ国が友好関係を結ぶこととなったのである［大澤 1996，pp.1-6］[22]。バルス＝ベグは東突厥の傀儡可汗であったにもかかわらず、密かに唐と結び、三国同盟によって默啜可汗を打倒しようとしたのである。その動きに対して東突厥は710年に黠戛斯を攻撃して可汗（すなわち、バルス＝ベグ）を殺害すると、そのまま突騎施を攻撃して710～711年に娑葛を殺害し、一旦突騎施可汗国を滅亡に追い込んだのである［岩佐 1936，pp.195-201；内藤 1988，pp.360-361］。

砕葉に拠っていた娑葛が殺害されたことにより、砕葉の地は一時的に空白となった。そこで唐は、娑葛の時代に十姓可汗としていた阿史那献を、711（景雲二）年に「安撫招慰十姓大使・興昔亡可汗」として、旧西突厥諸部の統御を行わせようとした［内藤 1988，pp.82-85；斉藤 1991，p.38］。それにもかかわらず、714（開元二）年に砕葉を奪ったのは、旧西突厥の一派である胡禄屋部出身の都担であった［松田 1933，p.373；内藤 1988，pp.72-75］。この都担の乱は、同年中に磧西節度使を帯びた阿史那献によって鎮圧され［『資治通鑑』巻二一一「玄宗開元二年条」（p.6698）］、大事にはいたらなかった。しかし、内藤氏によれば、この乱に呼応して東突厥が北庭都護府を攻撃しており、その目的は、北庭都護府を越え砕葉の地まで占領することにあったという［内藤 1995a，pp.36-37］。ところが、この計画は北庭攻撃の際に、默啜可汗の息子、同俄特勤の戦死によって頓挫し、東突厥は退却した［内藤 1995a，pp.34-35］。

一方、東突厥に滅ぼされた突騎施の別部である黒姓突騎施から、新たに蘇禄が現れて突騎施を復興させ［松田 1933, p.371；内藤 1988, pp.354-355］、716（開元四）年に自立して可汗となった［『資治通鑑』巻二一一「玄宗開元四年条」（p.6720）］。これに対して、唐は716（開元四）年か717（開元五）年に、阿史那献を再び十姓可汗に冊立し、蘇禄を都督に任命することで、蘇禄を懐柔しつつ阿史那献の優位を示そうとした［斉藤 1991，p.40-42］。しかし、この情勢は、717（開元五）年六・七月に起こった阿史那献の独断による蘇禄討伐と、献の敗北によって早くも崩れ、唐は蘇禄の優位を認めることとなる［斉藤 1991，p.43］。すなわち、718（開元六）年に蘇禄を順国公に冊封し、さらに翌719（開元七）年には蘇禄を忠順可汗に冊立して、それまで認めてこなかった可汗の地位を授けたのである［『冊府元亀』巻九六四「外臣部 封冊二」（明版，p.11343）］。

そして、同719年に、唐は遂に砕葉鎮を名目上も放棄して焉耆鎮を四鎮に加え、その後、二度と砕葉の地を影響下に置くことができなかった［松田 1933，pp.384-391］。その際、いかにして唐が砕葉鎮を放棄するにいたったかは、問題がある。その様子を述べた史料としては、次の記述しかないからである。

『新唐書』巻二二一上「西域伝上 焉耆国条」（p.6230）
於是十姓可汗請居砕葉、安西節度使湯嘉恵表以焉耆備四鎮。
【和訳】そこで、十姓可汗が砕葉に住みたいと請願したため、安西節度使の湯嘉恵は焉耆を四鎮に加えたいと上表した。

ここで、砕葉への移居を請願した十姓可汗が何者か、これまで議論があり、阿史那献と考える説［松田 1933，p.382；伊瀬 1955，pp.293-300；内藤 1988，pp.86-87］と、蘇禄と考える説がある［佐藤 1943，pp.78-88；周偉洲 1977, pp.143-147；薛宗正 1984, p.83；Beckwith 1987, p.90］。この問題に関しては、斉藤［1991，pp.40-51］が次のような論拠から、蘇禄説を支持した。①蘇禄は唐から都督→国公と位を進められた結果、719（開元七）年に忠順可汗に冊立されており、唐との関係の進展を窺わせる。それゆえ、唐は忠順可汗冊立の時点で十姓可汗による統御を諦めたはずである。②十姓可汗・阿史那献は、716・717（開元四・五）年に砕葉付近にいたことが確認できるものの、719年のことは記述がない。③719年当時は、唐が砕葉に十姓可汗を派遣できるような情勢ではない。④上引の『新唐書』の記事は、編者が蘇禄を十姓可汗と誤認した可能性がある。

一方、この当時の状況と深く関わる文書が劉安志［2002］によって紹介されているのでここで紹介しておきたい。それはトルファンの鄯善県より出土した「唐開元五年（717）後西州献之牒稿為被懸点

入軍事」であり、西突厥東西十部のうち、東部咄陸部に属す胡禄屋部塩泊都督府の官員であった献之なる人物が提出した牒である。劉安志［2002, pp.178-186］の解釈によれば、開元五年十一月に「定遠道行軍大総管・可汗」である阿史那献によって、献之は定遠軍に徴発され、721（開元九）年にいたってようやくトルファン近辺の自部落に帰還することができたという。そして、開元五年段階の定遠軍は東部天山地域にあり、東突厥の攻撃を防ぐ役割を帯びていたとする［劉安志 2002, p.201］。このように、721年段階でも阿史那献の支配がいまだ西突厥諸部に対して十分にいきわたっていることから、劉氏は『新唐書』「西域伝」の「十姓可汗」を蘇禄ではなく献であると主張するのである。とはいえ、本文書では阿史那献に対して「十姓可汗」ではなく単に「可汗」と呼んでいる点や、劉氏自身も述べているように、献の活動域が砕葉ではなく東部天山地域である点など、「砕葉の十姓可汗」を論じるに当たって不十分な点も多い。今後はこの劉氏の説と斉藤説をより詳細に比較検証していく必要があるだろう。それゆえ、現時点では筆者は斉藤氏の説に従っておきたい。

いずれにせよ、砕葉城は719年に蘇禄の勢力圏に入れられることとなった。唐は同時に蘇禄に対する懐柔策として、娑葛に対抗する十姓可汗であった阿史那懐道の娘を、722（開元十）年十二月に交河公主[23]として蘇禄に出嫁した［『資治通鑑』巻二一二「玄宗開元十年十二月庚子条」（p.6754）］[24]。砕葉についてはこれ以後、漢籍史料の記述にほとんど現れなくなるのである[25]。

以上のように、砕葉を含む東トルキスタンの歴史的推移は極めて複雑であるが、重要なのは、正統西突厥王族・阿史那氏の権威が長年にわたって残り続けたことであろう。それゆえ、唐も吐蕃も傀儡可汗を立てて砕葉進出を企図したのであり、砕葉は西突厥の権威下にあったと言えよう。この権威が崩れるのは突騎施の台頭からで、それ以来、カルルク、カラハン朝といった勢力が登場して阿史那氏は表舞台から消えることとなるのである。

Ⅱ.「杜懐宝碑」について

前章では、主に漢籍史料より、砕葉周辺の歴史的推移を概観した。次に、アクベシム遺址より発見された漢語碑文について見てみたい。

砕葉城をアクベシム遺址に比定する試みは、従来から行われてきたが［Clauson 1961, p.4；張 1979, p.463］、有力な証拠が発見されなかったため、確定していなかった。ところが、1982年にアクベシム遺址内から当地が砕葉城であることを裏付ける漢語碑文が発見された。

この碑文は、ゴリャチェワ・ペレグドワ両氏によって初めて紹介された［Горячева / Перегудова 1996, pp.185-187；cf. 加藤 1997, pp.148-149］。続いて内藤みどり氏は、この碑文の拓本を将来した川崎建三氏より拓本の提供を受けて録文を発表した上で、その碑文の持つ歴史的背景を考察している［内藤 1997］。さらに、ルド＝レスニチェンコ［Лудо-Лесниченко 2002, pp.123-126］や薛宗正［2010, pp.133-137］も内藤氏の議論を取り入れつつ、この碑文について言及し、周偉洲［2000］は一部、内藤氏の議論を改めている。

ここで、まず本碑文の録文を提示するが、筆者もまた、川崎氏より拓本のコピーを提供していただいたため、その実見結果に基づき、内藤氏の録文を一部改訂して提示する[26]。

【録文】	【和訳】
【録文】	【和訳】
1．□□(安)西副都	安西副都
2．□(護)砕葉鎮壓	護・砕葉鎮圧
3．十姓使上柱國	十姓使・上柱国・
4．杜懐□(宝)□上為	杜懐宝は、上は
5．天皇□(天)□(后)□[27]下	天皇・天后のために、下は
6．□□□□□妣	・・・亡母（のために）
7．見□□□使之[28]	・・・・・・・・・
8．法界□□[29]生普[30]	世界の民衆（？） （のために？）
9．願平安獲其	平安に冥福を得ることを
10．暝福敬造一佛	あまねく願い、謹んで仏像一体と
11．□[31]菩薩	菩薩像二体（＝三尊像）を造像いたします。

既に内藤氏が述べているように、この碑文は安西副都護であった杜懐宝なる人物が、亡母のために寄進した仏像の台座（厚さ約11㎝，幅約32.6㎝，高さ約13.5㎝）であり、いわゆる造像碑であったと考えられる［内藤 1997，pp.151-152］。

では、安西副都護の杜懐宝とはいかなる人物だったのであろうか。この人物には列伝が無く、次の史料がほとんど唯一の記録である。

張説「夏州都督太原王公神道碑」『文苑英華』巻九三「碑」（p.4804）
裴吏部名立波斯、実取遮匐、偉公威厲、飛書薦請、詔公為波斯軍副使兼安西都護・上柱国、以安西都護懐宝為庭州刺史。大城砕葉、街郭迴互、夷夏縦観、莫究端倪。･･･（中略）･･･無何、詔公為庭州刺史，以波斯使領金山都護。前使杜懐宝更統安西、鎮守砕葉。･･･（後略）
【和訳】裴行倹は名目は波斯（ペルシア）（の王子）を擁立するとして、実際には（李）遮匐を捕らえた時に、公（＝王方翼）の盛んな意気を出色のものと認め、急ぎ上奏文を送って推挙したので、公に詔勅が下されて波斯軍副使兼安西都護とし、（勲官を）上柱国とする一方、安西都護であった（杜）懐宝を庭州刺史とした。大都市である砕葉は大通りや城郭が入り組んでおり、漢人や外国人があまねく見て回っても、端まで行き着くことができなかった。･･･（中略）･･･ほどなくして、公に詔勅が下されて庭州刺史とし、波斯使として金山都護（庭州所在の都護府、後の北庭都護府）を管領させた。前任者の杜懐宝は交代に安西を統御し、砕葉を守備した。･･･（後略）

この記事は、張説が記した王方翼の神道碑である。前半部は677（儀鳳二）年に反乱を起こした処木昆部の阿史那都支と李遮匐に対して、679（調露元）年に裴行倹が奇襲して両者を捕らえた事件について記している［内藤 1988，pp.275-280］。この時、裴行倹は「安撫大食使」を称して、長安にいたペルシアの王子を本国に帰還させるという名目で軍を旧西突厥の勢力圏に侵入させ、両者を捕らえることに成功したのであった。この後の文章で、杜懐宝と交代して王方翼が安西都護に就任したことが記される。上述したように、王方翼はこの時に砕葉城の城壁を修築したが、これは679年九月のことである［『唐会要』巻七三「安西都護府条」（p.1571）］。さらに、王方翼は庭州刺史に異動になり、交代にそれまで庭州刺史であった杜懐宝が砕葉に赴任することとなったが、内藤［1997，p.154］やルド＝レスニチェンコ［Лудо-Лесниченко 2002, p.126］は、この交代の時期を、679年末から680（永隆元）年初の間のことであっただろうと推測している。そして、内藤［1997, pp.152-153］は、砕葉赴任時の杜懐宝の役職として、「杜懐宝碑」に記された「安西副都護」とならんで、上で引いた神道碑に「砕葉を鎮守す」とあることから、「砕葉鎮守使」を想定する。すなわち、「杜懐宝碑」は「砕葉鎮守使・鎮圧十姓使」と記すべき所を、「鎮」字の重複から誤記したと推測したのである。

しかしながら、可能性は十分あるものの、やはり神道碑の文言のみから砕葉鎮守使の役職を導き出すことは、残念ながら現時点では推測の域を出ていない。一方、薛宗正［2010, pp.136-137］は内藤氏の「鎮」字重複説を批判して、この部分を「砕葉鎮・圧十姓使」と読み、「圧」字を「押」字と同義と見て杜懐宝が「押十姓使」であったと考えた。とはいえ、「圧」を「押」字の代わりに使用している例を薛氏が提示しているわけではなく、これまた推測と言わざるをえない。

また、周偉洲［2000, pp.388, 390］も内藤氏の「砕葉鎮守使」説を批判して、「砕葉鎮圧十姓使」とは、砕葉を任地として、広く十姓部落を安撫する使職であると述べ、この臨時の使職がやがて、常設の「砕葉鎮守使」に変化していくと推論している。

このように、「砕葉鎮圧十姓使」の部分は難解で未だに確実な結論が出ているわけではない。今後の研究進展に期待したい。いずれにせよ、杜懐宝が安西副都護であり砕葉に赴任していたこと、それゆえ発見地であるアクベシムが砕葉城であることが、「杜懐宝碑」の発見により裏付けられたのである。[32)]

当碑文の作成年代に関して、周偉洲［2000, pp.389-390］は、王方翼と交代して杜懐宝が砕葉に赴任した679年から、再び安西四鎮が吐蕃によって陥落する686年の間とした（安西四鎮の沿革については本稿第１章参照）。一方、内藤氏は「杜懐宝碑」にある「十姓」という語にも着目してさらなる厳密な作成年代を提案する。既に述べたように、「十姓」とは、本来は西突厥を構成する主要な10部落のことを指しており、その10部落の上に正統な阿史那氏の可汗が君臨していたのが西突厥可汗国であった［内藤 1988，p.67］。そして、阿史那賀魯が唐に倒されて西突厥が滅亡して以後は、王方翼に捕らえられた上述の阿史那都支（非正統阿史那氏）が十姓部落を再構成し、その連合体の長として「十姓可汗」を自称して以後、滅亡後の西突厥を指す名称として定着していく［内藤 1988，pp.67-68］。

この杜懐宝が碎葉に赴任したと見られる679年以後においては、阿史那都支に続いて「十姓可汗」を自称して唐と敵対した阿史那車簿がいた。阿史那車簿もまた非正統阿史那氏の出身であり、682（永淳元）年にモンゴル時代のアルマリク付近に相当する唐の弓月城[33]を攻囲したが、出撃した王方翼に破られている［内藤 1988, pp.68-72, 284-288］。内藤［1997, p.156］は、「杜懐宝碑」に現れる「鎮圧十姓使」とは、この阿史那車簿の乱の際に碎葉城を守備し、進軍してきた車簿の軍を撃破するために杜懐宝が帯びた役職であったと考えている。車簿の乱が平定された後には十姓の動きは沈静化するため、本碑文の作成年代は682年に限定されると論じたのである［内藤 1997, p.157］。

ところが、周偉洲［2000, p.388］は、阿史那車簿の乱発生から数ヶ月以内の旧西突厥が混乱している時に、杜懐宝が親の冥福を祈る仏像を建立するか疑問であるとして、内藤説を批判し、杜懐寶が碎葉城に赴任した679年から、吐蕃が再び碎葉城を占領した686（垂拱二）年までと作成の範囲を広く取っている。しかし、内藤［1988, pp.60-64］によれば、677（儀鳳二）年に反乱を起こした阿史那都支の時には、まだ集団名としての「十姓」の称は見られず、682年の阿史那車簿の乱の際に、ようやく漢籍に「十姓突厥」の呼称が見られることなどから、680年代から690年代に唐側は旧西突厥を「十姓」の呼称で把握するようになったという。とすると、本碑文に「十姓」の語が現れるということは、唐が「十姓」という呼称を使い始めた時期とほぼ重なるということであり、阿史那車簿の乱をきっかけとして唐が「十姓」の称を用いることとなった可能性も考えられよう。それならば、内藤氏が論じたように、682年のみに限定することはできなくとも、682年から686年の間に作成年代を限定することができるのではなかろうか。

さらに、「杜懐寶碑」中に「天皇」の語句を読み取ることができたことで、さらに年代のはばが狭まる可能性がある。というのも、天皇という称号は唐の第３代高宗が674（上元元）年から683（弘道元）年の約10年間の間だけ用いた称号だからである。『旧唐書』巻五「高宗紀」（p.99）には、「（咸亨五年八月）皇帝稱天皇、皇后稱天后（咸亨五（674）年八月に、皇帝高宗は天皇と称し、皇后武則天は天后と称することとした）」という記述があり、これ以降、高宗は天皇と、後に史上唯一の女帝となる皇后の武則天は天后と呼称されることとなった。この称号は、高宗死去まで存続した。『旧唐書』巻六「則天皇后紀」（p.116）には、「弘道元年十二月丁巳、大帝崩、皇太子顯即位、尊天后為皇太后（弘道元（683）年十二月四日、高宗は崩御して皇太子の顯が即位し、天后を尊崇して皇太后とした）」という記述があり、武則天が天后から皇太后となったことが確実であるが、天皇についてはここに記述がない。しかし、『旧唐書』巻六「則天皇后紀」（p.116）には、「（嗣聖元年）二月戊午、廢皇帝為盧陵王、幽于別所、仍改賜名哲（嗣聖元（684）年二月六日、武則天は皇帝中宗を廃位して盧陵王として別所に幽閉し、哲に改名させた）」とあって、「皇帝」という称号が明記されている。そもそも、羅新［2009, pp.230-231］によれば、皇帝・皇后を天皇・天后に改称したのは、既存の皇后の地位を超越し皇帝と並ぶ存在となることを目指した武則天の意志による。すなわち、天后号の創設こそがこの改称の主眼であり、天皇号はそれに付随する称号だったと言える。さらに、羅新［同上］は、高宗が死去した際にも武則天の権力は損なわれることが無く、やがて皇帝を超越した「聖母神皇」なる称号を自称すると指摘している。以上の見解に従えば、天后号が廃止された683年の段階で天皇号を存続させる意味はなくなっていたと考えてよく、683年末に天皇号も廃止されたと見るべきであろう。

以上の考察を歴た上で再び「杜懐寶碑」に話題を戻せば、「上は天皇・天后のために」と記された本碑文は、亡母とならんで君主たる天皇高宗と天后武則天に仏像寄進の功徳が廻向されることを祈願した文章と考えることができよう。それゆえ、その作成年代は天皇号が使用された674年から、高宗崩御の情報が碎葉まで伝わる時間を考えても684年中までと見て大過ないだろう。加えて、内藤氏による「十姓」の呼称が682年の阿史那車簿の乱以降にならなければ現れないとする見解をふまえれば、その作成年代は682年から684年の間である可能性が高いのである[34]。

Ⅲ．結び

以上に見てきたように、７世紀から８世紀にかけての碎葉は、西突厥系の遊牧民の活動を主軸としながら、唐・吐蕃・東突厥などの様々な勢力がせめぎ

合う係争地であった。砕葉は、玄奘の報告にあるように各地の商人が集まる国際都市でありながら、周辺は遊牧民の根拠地となりうる豊かな草原地帯であり、わずかな期間であるとはいえ、唐の内陸アジア支配の拠点のひとつとなったのである。

砕葉の地理的重要性に関して、松田［1963, pp.430-431］は西方のマーワラーアンナフルのオアシス商業圏と北方の遊牧圏、そして東方の中国との交渉地点として砕葉を捉え、この地域を支配することで唐は内陸アジアの隊商貿易を中国側に好転させようとしたと指摘した。また、内藤［1988, pp.37-38］は砕葉城をソグド人の商業都市と捉えた上で、西方の西域から東方の中国、あるいは北方にチュー＝イリ山脈を越えてアルタイからモンゴリアへと続く交通の要衝であり、ソグド植民市の東方世界との出入り口であったとする。さらに、より詳細に西域における唐の交通体制を研究した荒川［2010, pp507-508, 517］は、唐による砕葉鎮の整備に関して、唐が遊牧国家から天山北路のステップルートの主導権を奪い取り、交通路を整備しようとした現れであると評価し、東部天山地方のジムサに置かれた北庭（ビシュバリク）も同様の意義を持っていたと考えている。

このように、砕葉は西域における遠距離交易路の要衝として発達したのであるが、一方では遊牧民と定住民との接点としての意味合いも兼ね備えていた。石見［2008, p.71；Iwami 2008, p.49］は、８世紀中葉に突厥第二可汗国を滅ぼしてモンゴル高原の覇権を握った東ウイグル可汗国の首都、オルドバリク（現カラバルガスン遺跡）や、13世紀におけるモンゴル帝国の首都、カラコルム（現ハラホリン）と同様、砕葉城も西突厥の首都として機能しながら、遊牧民が住まう都市ではなく、外国使節や外国商人のために存在していたと指摘する。

このように、砕葉を研究する際には、オアシス定住都市同士をつなぐ視点と、遊牧民と定住民をつなぐ視点との両者が必要なのであり、従来の「西域史」や「中央アジア史」を越えた、広い視点が重要となる。その点でいえば、近年、遊牧民と定住民の関わりが歴史研究の中で重視されるようになり、中央ユーラシア史と東アジア史の連動を意識した「東部ユーラシア史」研究が盛んとなっていることは注目に値する。[35] 遊牧地域と定住都市の関係を考察するうえで、両地域の結節点に位置する砕葉城の持つ歴史的重要性は、東部ユーラシア史の一貫として、今後もますます考察する意義が高まるはずである。

これらの課題を考えるに当たって、砕葉城に比定されるアクベシム遺跡を発掘することは極めて重要な意味を持つことは疑いない。内陸アジア商業都市の実態や、遊牧民と都市との関係、唐による異民族支配の実態など、様々な側面から新たな事実が明らかになることで、東部ユーラシア史に新たな光が当たるだろう。

註

1）本稿は、2016年に公刊された日本語論文［齊藤 2016］、その加筆英訳版［Saito 2017］の内容に、さらに増補修訂を加えたものである。なお、本稿が砕葉に関わる中央アジア情勢を広く概説する一方で、砕葉城とその周辺のみに焦点を絞った齊藤［印刷中］は本稿と対になる論稿であるため、そちらも参照していただきたい。

2）突厥文字古代トルコ語の突厥碑文では Ištämi Qaγan として記され［cf. Tekin 1988, pp.8-9, 70］、漢字では室点密可汗や瑟帝米可汗と音写されている。伝説上の可汗ともされているが［松田 1929, p.256］、メナンドロスが記したギリシャ語史料［cf. 内藤 1988, pp.374-395］に現れる可汗、ディザブロス（ディルジブロス／シルジブロス）と結果的に同一人物と考えられている［内藤 1988, p.399］。

3）滅亡後も含めた西突厥可汗系図は、内藤［1988, p.256］を参照いただきたい。

4）同時期には、東突厥第３代木汗可汗の曽孫である泥撅処羅可汗が、後の北庭都護府（ビシュバリク；現ジムサ）付近に拠点を持っていた［嶋崎 1977, pp.181-182］。

5）砕葉城がアクベシム遺跡であることは後述する。

6）玄奘の長安出発年を 629（貞観三）年とし、砕葉訪問を630年とするド＝ラ＝ヴェシエール［de la Vaissière 2010, p.166］に従う。

7）この史料中に単に「葉護可汗」と呼ばれている人物は、長らく統葉護可汗を指すと考えられてきたが、その次の可汗である肆葉護可汗を指すと考えるべきであることが明らかにされた［de la Vaissière 2010, pp.165-166］。

8）安西四鎮が置かれたオアシス諸国に対する羈縻支配は、従来通りの国王を中心とする都督府と、唐の鎮守軍とによる二重統治体制であった［森安 1984, pp.193-197；Zhang / Rong 1987, pp.90-91；張／栄 1988, pp.111-117；荒川 1997, pp.10-16］。

9）この阿史那賀魯征討については、松田［1930, pp.341-351］を参照のこと。

10）本稿では、阿史那賀魯政権滅亡以前の阿史那氏王統による国家を呼ぶ場合には「西突厥」と、滅亡以後の西突厥を構成していた集団を指す場合には「旧西突厥」と呼称して区別している。

11）旧稿［齊藤 2016, p.83］では誤って、砕葉に崑陵都護府

が置かれたと記載していたが訂正する。

12）安西都護府が陥落し、トゥルファンに後退したことは、トゥルファンアスターナ61号墓出土曹禄山関連文書［『吐文』3, pp.242-247］からも知ることができる。荒川［2010, p.374］・Ōsawa［2012, pp.245-247］・劉子凡［2016, pp.172-177］参照。

13）柿沼［2019, pp.51-52］は「四面十二門」の表現は現実を反映していない誇張ではないかと推測しているが、大いにあり得ることであろう。

14）劉子凡［2016, p.204］は、686年に阿史那斛瑟羅が西突厥西部５部を統率するにいたったのは、碎葉城が陥落して唐が直接統治を行えなくなったためであるとしている。

15）突厥遺民に対する羈縻支配と第二可汗国の建国については、岩佐［1936］・石見［1987］・齊藤［2009, 2011］を参照のこと。

16）近年、東突厥史研究の中で、始祖ブミン可汗より始まる突厥可汗の権威が、支配の正統性を得るうえで重要であるという議論が盛んである。そうした議論から、突厥第二可汗国がその系譜を捏造してブミン可汗の直系であると僭称していたこと［鈴木 2008, pp.147-145］や、唐がブミン可汗直系の阿史那感德を突厥遺民支配のための傀儡可汗としていたこと［齊藤 2011, pp. 25-31］が明らかになっている。今後は、西突厥における阿史那氏の権威に対しても目を配る必要があろう。

17）古代チベット語史料中のDru-guとはTürkの音写であり、テュルク族一般を指していることは森安［1977, pp.73-76］を参照のこと。

18）ベックウィズ［Beckwith 1987, pp.63-64, n.56］は、森安氏の東突厥遣使説を批判して、Old Tibetan Annalsにおいては東突厥は別にブグチョル 'Bug-čhor として現れており、Dru-gu は全て西突厥を指しているとして、西突厥遣使説を採った。しかし、別稿［齊藤 2013；齊藤 2014］で述べたように、ブグチョルとは東突厥そのものを指す用語ではなく、ビルゲ可汗即位時の粛清を逃れた先代カプガン可汗（黙啜＝ブグチョル）の息子を中心とした遺民集団であるため、直接反論の材料にはならない。いずれにせよ、Dru-gu が西突厥のみを指すのか、東突厥も指しうるのかは、改めて議論すべき問題である。

19）阿史那懐道は、本人と妻の墓誌が発見されており、妻は六胡州の安氏であったことが判明している［石川 2011, pp.28, 44］。

20）景龍三年五・六月における唐軍と娑葛軍の安西都護府付近の戦闘について、敦煌発現の「張君義文書」から窺い知ることができる。内藤［1995b］・劉安志［2002］参照。

21）旧稿［齊藤 2016, p. 86；Saito 2017, p.97］では、松田［1933, pp.370-371］に従い、十四姓を、十姓に加えて、十姓の一部である突騎施部の下位集団である黒姓突騎施と黄姓突騎施を別部と見なして「十一姓」とし、さらに三姓葛邏禄（カルルク）を加えた称号、とみなしていたが、内藤［1988, p.356］による、突騎施部全体を統べる可汗であるはずの娑葛が、突騎施部を黒姓と黄姓の両集団に分けて把握するはずがない、という指摘はもっともであると考え直したため、修正した。

22）内藤［1988, pp.39-40；1995a, pp.37-39］はこの傀儡可汗となったバルス＝ベグを旧西突厥の出自であると考えているが、突厥碑文の構成から黠戛斯出自と考えた大澤説に従う。

23）交河公主については、史料によって「金河公主」とするものがあり、さらに、阿史那懐道の娘とされているが実際は義理の娘であるとする説［石見 2000, pp.374-375］もあった。しかし、阿史那懐道とその妻である安氏の両墓誌が発見され、娘の出嫁の話題が両墓誌ともに見られることから、実女であることが確認されている［石川 2013, pp.32-34］。

24）交河公主の出嫁を 717（開元五）年とする『唐会要』巻六「和蕃公主」（p.87）の記述もあるが、『資治通鑑』を信じるべきとする岑仲勉［1958, p.88］の説に従う。

25）『通典』巻一九三所収、762 年以後成立の杜環『経行記』逸文（p.5275）に、748（天宝七）年に北庭節度使・王正見の攻撃で城壁が破損したこと、大雲寺という寺院があって、杜環が訪問した時にはまだ現存していたことなどが報告されるのみである。

26）内藤氏の録文の他、周偉洲［2000, p.384］・Лудо-Лесниченко［2002, p.124］・薛宗正［2010, pp.134-135］・柿沼［2019, p.53］にも独自の録文がある。本碑文は長らく拓本写真など文字の判読が可能な図版が提供されてこなかったが、城倉他［2017, pp.165-166, 173］が、碑文の写真ならびに碑文の 3D スキャン画像を公開した。これらの鮮明な図版により、ようやくそれぞれの釈読が検証可能になった。なお、ここで提示した録文ならびに注釈は旧稿［齊藤 2016；Saito 2017］より改めたもので、齊藤［印刷中］にも掲載したものである。

27）柿沼に従い、旧稿に加えて「天后」の２文字を補う。

28）「之」の字は従来読まれていなかったが、柿沼が初めて読み取った。

29）この１字には、「衆」や「蒼」などが入り、次の「生」と合わせて「民衆」の意味になる（「衆生」・「蒼生」）と推測する。

30）内藤氏とルド＝レスニチェンコ氏は「晋」に作る［内藤 1997, p.151；Лудо-Лесниченко 2002, p.124］が、図像からは「普」に見える。周偉洲［2000, p. 384］・薛宗正［2010, pp.134-135］・柿沼［2019, p.53］の録文も「普」としている。

31）本稿では従来通りの解釈に従い、「二」と読むが、現物を実見した柿沼［2019, p.53］は「一」と読んでいる。今後の検討を俟ちたい。

32）従来は、碎葉鎮をアクベシムとは別の場所に比定する見解もあった。その一例として、王永興［1994, pp.193-194］は、安西四鎮に含まれ、王方翼が修築した碎葉城はアクベシムではなく、焉耆都督府管内にあったと『新

唐書』巻四三下「地理志七下」（p.1134）の記述を根拠として論じたが、「杜懐宝碑」の発見により完全に成り立たなくなった。「杜懐宝碑」発見以前に漢籍史料の解釈より王説を批判した論文としては呉震［1978］がある。

33）弓月城の地理比定については、松田［1930, pp.336-338］による。その政治的・経済的重要性については、Ōsawa［2012, pp. 250-255］参照。

34）旧稿［Saito 2017, p.101］でも同じ結論に達したが、柿沼［2019, p.53］によって、天皇号廃止以後、武周革命（690年）以後の造像銘においても、天皇・天后時代の銘文が流用されて使用された例があるため、時代の特定には慎重になるべきという批判が出された。それゆえ、柿沼氏は吐蕃によって砕葉城が占領された686年を作成の下限としている。しかしながら、安西副都護までつとめた人物によって、中央アジアの新規占領地でわざわざ作成された祈願文に、流用された文章が使われる可能性は決して高くないように思われる。それゆえ、拙速に自説を変更せず諸賢の御批正を仰ぐこととし、旧稿を改めなかった。

35）研究者によってこの地域に対する呼称・定義は異なるものの、問題意識は共通している。その概観は石見［1999］・森安［2007, pp.60-61］・妹尾［2009, pp.113-116］・古松［2020, pp.2-23］・森部［2020］などを参照のこと。関係する個別研究は膨大になるため割愛する。

参考文献

※再録がある場合、頁は再録のみを提示。本文では再録の該当箇所を提示。

『大唐西域記』＝京都帝大校訂本.

『大慈恩寺三蔵法師伝』／『旧唐書』／『新唐書』／『資治通鑑』／『通典』＝中華書局標点本.

『冊府元亀』（明版）／『文苑英華』＝中華書局影印本.

『唐会要』＝上海古籍出版社標点本.

『唐大詔令集』＝商務印書館排印本.

『吐文』＝唐長孺（主編） 1992-1996：『吐魯番出土文書』1-4, 文物出版社.

荒川　正晴　1997:「クチャ出土『孔目司文書』攷」『古代文化』49, pp.1-18.

荒川　正晴　2010：『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋, 名古屋大学出版社.

石川　澄恵　2011：「唐の則天武后期における六胡州とオルドス情勢――「阿史那懐道夫人安氏墓誌」を手掛かりに――」『史艸』52, pp. 28-56.

石川　澄恵　2013：「唐初期の西方経営と西突厥阿史那氏について――阿史那懐道夫妻墓誌を手掛かりに――」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』19, pp.25-40.

伊瀬仙太郎　1955:『中国西域経営史研究』東京, 巌南堂書店.

岩佐精一郎　1936:「突厥の復興に就いて」和田　清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京, 岩佐傳一発行, pp.77-167.

石見　清裕　1987：「唐の突厥遺民に対する措置」『日野開三郎博士頌壽記念論集 中国社会・制度・文化史の諸問題』福岡, 中国書店 .（再録:『唐の北方問題と国際秩序』東京, 汲古書院, 1998, pp.109-147）

石見　清裕　1999：「ラティモアの辺境論と漢～唐間中国北辺」唐代史研究会（編）『唐代史研究会報告第Ⅷ集 東アジアにおける国家と地域』東京, 刀水書房, pp.278-299.

石見　清裕　2000：「唐代「沙陀公夫人阿史那氏墓誌」訳注・考察」『村山吉廣教授古稀記念中国古典学論集』汲古書院, pp.361-382.

石見　清裕　2008：「唐とテュルク人・ソグド人――民族の移動・移住より見た東アジア史――」『東アジア世界史研究センター年報』1, pp.67-81.

大澤　孝　1996：「８世紀初頭のイェニセイ・キルギズ情勢――バルス・ベグの出自と対東突厥征伐計画をめぐって――」『史朋』28, pp.1-24.

大谷　勝眞　1925：「安西四鎮の建置とその異同に就いて」池内　宏（編）『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』東京, 岩波書店, pp.271-292.

柿沼　陽平　2019：「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, pp.43-59.

加藤　九祚　1997：「セミレチエの仏教遺跡」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4)』, pp.121-184.

齊藤　茂雄　2009：「唐代単于都護府考――その所在地と成立背景について――」『東方学』118, pp.22-39.

齊藤　茂雄　2011：「突厥「阿史那感德墓誌」訳注考――唐羈縻支配下における突厥集団の性格――」『内陸アジア言語の研究』26, pp.1-38.

齊藤　茂雄　2013：「突厥第二可汗国の内部対立――古チベット語文書（P.t.1283）にみえるブグチョル（'Bug-čhor）を手がかりに――」『史学雑誌』122-9, pp.36-62.

齊藤　茂雄　2014：「突厥とソグド人――漢文石刻史料を用いて――」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉（アジア遊学 175)』東京, 勉誠出版, pp.217-233.

齊藤　茂雄　2016：「砕葉とアク・ベシム――７世紀から８世紀における天山西部の歴史的展開――」独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター（編集・発行）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡――2011～2014年度――』, pp.81-92.

齊藤　茂雄　印刷中：「漢文史料にみえる砕葉」『キルギス共和国アク・ベシム遺跡の研究』（早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所調査報告 第５冊）.

斉藤　達也　1991：「突騎施の台頭と唐の砕葉放棄について」『史滴』12, pp.34-53.

佐藤　長　1943：「初代磧西節度使の起源と其の終末（下）――砕葉焉耆更換事情の一考察――」『東洋史研究』8-2, pp.73-91.

佐藤　長　1958：『古代チベット史研究　上巻』京都, 東洋

史研究会.
嶋崎　昌　1977：『隋唐時代の東トゥルキスタン研究――高昌国史研究を中心として――』東京，東京大学出版会.
城倉　正祥／山藤　正敏／ナワビ　矢麻／伝田　郁夫／山内　和也／バキット　アマンバエヴァ　2017：「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究――土器・塼・杜懐宝碑編――」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』5，pp.145-175.
鈴木　宏節　2008：「突厥可汗国の建国と王統観」『東方学』115，pp.157-141（逆頁）.
妹尾　達彦　2009：「北京の小さな橋――街角のグローバル・ヒストリー――」関根　康正（編）『ストリートの人類学（下）』（国立民族学博物館調査報告81）吹田，人間文化研究機構国立民族学博物館，pp.95-183.
内藤みどり　1988：『西突厥史の研究』東京，早稲田大学出版部.
内藤みどり　1995a：「突厥カプガン可汗の北庭攻撃」『東洋学報』76-3/4，pp.27-57（逆頁）.
内藤みどり　1995b：「「張君義文書」と唐・突騎施娑葛の関係」『小田義久博士還暦記念 東洋史論集』京都，龍谷大学東洋史学研究会，pp.181-208.
内藤みどり　1997：「アクベシム発見の杜懐宝碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4）』，pp.151-184.
ヌルラン・ケンジェアフメト　2009：「スヤブ考古――唐代東西文化交流――」窪田順平他，（編）『イリ河歴史地理論集――ユーラシア深奥部からの眺め――』京都，松香堂，pp.217-301
古松　崇志　2020：『草原の制覇――大モンゴルまで――（シリーズ 中国の歴史③）』（岩波新書（新赤版）1806）岩波書店.
松崎　光久　1987：「隋末唐初焉耆王統攷――六四四（貞観一八）年、焉耆攻略事件の背景――」山田　信夫，他『中央ユーラシア史の再構成――新出史料の基礎的研究――（昭和61年度科学研究費補助金（綜合研究 A）研究成果報告書）』，pp.31-43.
松田　壽男　1929：「西突厥王庭考」「西突厥王庭考（一）～（四）」『史学雑誌』40-1～4.（再録：同氏『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京，早稲田大学出版部，1970，pp.248-291）
松田　壽男　1930：「弓月についての考」『東洋学報』18-4.（再録：同氏『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京，早稲田大学出版部，1970，pp.324-356）
松田　壽男　1933：「碎葉と焉耆」『市村博士古稀記念東洋史論叢』東京，冨山房.（再録：同氏『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京，早稲田大学出版部，1970，pp.357-391）
松田　壽男　1937：「吐谷渾遣使考（上）（下）」『史学雑誌』48-11・12.（再録：『松田壽男著作集 4 東西文化の交流Ⅱ』東京，六興出版，1987，pp.68-126）
松田　壽男　1963：「碎葉路について」『オリエント』6-2.（再録：同氏『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京，早稲田大学出版部，1970，pp.414-432）
森部　豊　2020：「中国「中古史」研究と「東ユーラシア世界」」『唐代史研究』23，pp.5-13.
森安　孝夫　1977：「チベット語史料中に現れる北方民族――DRU-GU と HOR ――」『アジア・アフリカ言語文化研究』14.（再録：『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋，名古屋大学出版社，2015，pp.49-131）
森安　孝夫　1984：「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集 史学科編』4，pp.1-85.（再録：『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋，名古屋大学出版社，2015，pp.132-229）
森安　孝夫　2007：『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史第05巻）東京，講談社.
山口　瑞鳳　1983：『吐蕃王国成立史研究』東京，岩波書店.
岑　仲勉　1958：『西突厥史料補闕及考証』北京，中華書局.
劉　安志　2002：「跋吐魯番鄯善県所出《唐開元五年（717）後西州献之牒稿為被懸点入軍事》」『魏晋南北朝隋唐史資料』19.（再録：同氏『敦煌吐魯番文書与唐代西域史研究』北京，商務印書館，2011，pp.177-205）
劉　子凡　2016：『瀚海天山――唐代伊・西・庭三州軍政体制研究――』上海，中西書局.
羅　新　2009：『中古北族名号研究』北京，北京大学出版社.
努尔蘭・肯加哈買提　2017：『碎葉』上海，上海古籍出版社.
王　小甫　1992：『唐・吐蕃・大食政治関係史』北京，北京大学出版社.
王　永興　1994：「唐代前期安西都護府及四鎮研究」『唐代前期西北軍事研究』北京，中国社会科学出版社.（再録：『唐代経営西北研究』蘭州，蘭州大学出版社，2010，pp.93-196）
呉　震　1978：「唐碎葉鎮城析疑」『新疆歴史論文集』新疆人民出版社，pp.151-175.
呉　宗国　1982：「唐高宗和武則天時期安西四鎮的廃置問題」絲綢之路考察隊（編著）『絲路訪古』蘭州，甘粛人民出版社，pp.164-177.
薛　宗正　1984：「唐碎葉建置詮索」『新疆社会科学』1984-4（13），pp.73-91.
薛　宗正　2010：『北庭歴史文化研究――伊・西・庭三州及唐属西突厥左廂部落』上海，上海古籍出版社.
張　広達　1979：「碎葉城今地考」『北京大学学報』1979-5.（再録：同氏『文書・典籍与西域史地』桂林，広西師範大学出版社，2008，pp.1-22）
張　広達／栄　新江　1988：「《唐大暦三年三月典成銑牒》跋」『新疆社会科学』1988-1.（再録：同氏『于闐史叢稿（増訂本）』北京，中国人民大学出版社，2008，pp.106-117）
周　偉洲　1977：「略論碎葉城的地理位置及其作為唐安西四鎮之一的歴史事実」『新疆歴史論文集』新疆人民出版社，pp.135-150.
周　偉洲　2000：「吉爾吉斯斯坦阿克別希姆遺址出土唐杜懐

宝造像題銘考」『唐研究』6, pp. 383-394.

Beckwith, C. 1987: *The Tibetan Empire in Central Asia: A History of the Struggle for Great Power among Tibetans, Turks, Arabs, and Chinese during the Early Middle Ages.* Princeton, Princeton University Press.

Clauson, G. 1961: Ak Beshim—Suyab. *Journal of the Royal Asiatic Society* 1961-1/2, pp. 1-13.

Dotson, B. 2009: *The Old Tibetan Annals: An Annotated Translation of Tibet's First History*（Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften 381 Band, Veröffetlichungen zur Sozialanthropologie NR. 12）, Wien.

Горячева, В. Д. / Перегудова, С. Я. 1996: Буддийские памятники Киргизии. *Вестник древней истории,* pp.167-189.

Iwami, K. 2008: Turks and Sogdians in China during the T'ang Period. *Acta Asiatica* 94, pp. 41-65.

Лудо-Лесниченко, Е. И. 2002: Сведения китайских письменных источников о Суябе（городище Ак-Бешим）. In: *Суяб: Ак-Бешим,* Санкт-Петербург, pp. 115-127.

Ōsawa, T. 2012: The Significance of *Gongyue* City as a Sogdian Settlement on the Yili Steppe: An Analysis of Chinese Manuscripts from the *Turfan* Basin.『欧亜学刊』10, pp. 232-260.

Saito, S. 2017: Suiye（砕葉）and Ak-Beshim: a Historical Development at the Western Tien-shan in the 7th to the First Half of the 8th Century. In: Kazuya Yamauchi, Bakit Amambaeva, et al.（eds.）*Protection and Research on Cultural Heritage in the Chuy Valley, the Kyrgyz Republic: Ak-Beshim and Ken Bulun.* Tokyo, pp.91-107.

Tekin, T. 1988: *Orhon Yazıtları.*（Türk Dil Kurumu Yayınları 540）, Ankara.

de la Vaissière, É. 2010: Note sur chronologie du voyage de Xuanzang. *Journal Asiatique* 298-1, pp. 157-168.

Zhang, Guanda / Rong, Xinjiang 1987: Sur un manuscrit chinois découvert à Cira près de Khotan. *Cahiers d'Extrême-Asie, Revue de l'École Française d'Extrême-Orient* 3, pp. 77-92.